

ロータリー廣報乃王道

佐藤千壽



ロータリー廣報乃王道



佐藤千壽

題字·裝幀
著者

装画由来

吹けば飛ぶ様な小冊子ですが、例によつて装画も描いて欲しいと言われる——そこで本文の論旨を勘案して、表紙には桃の絵を描き――・〈桃李不言下自成蹊〉・——と賛を添えました。『史記』にある言葉で、「桃李言わざれば下おのずか自みちら蹊みちを成す」——意は、何も言わなくとも人徳あれば人は自然に帰服する……というのです。

中扉は御存じ：第二七八〇地区縁ゆかりりの小田原提灯です。古く室町時代、天文頃、小田原宿の住人甚左衛門が考案したものだそうで、由来小田原提灯と呼ばれて全国的に普及しました。

道中携帯用の小さな折畳み提灯ですが、闇夜に「天下の陰」を越えるにも無くてはならぬ灯火です。ロータリアン一人一人は、何も大きな燈台になろうなどと力まず、この小田原提灯であれば良いの

です。「広報」というのもそんなものではないでしょうか。

丁丑春一番の風に吹かれて

著者誌

目次

装画由来	3
ロータリー広報の王道	7
―組織の構造疲労に就いて―	7
あとがき	31

— 一九九六～九七年度 クラブ奉仕・広報雑誌セミナー・基調講演 —

ロータリー広報の王道

——組織の構造疲労に就いて——

もうだいたいぶ前の話ですが、ある地区の年次大会で、脚本家の橋田寿賀子さんが記念講演に招かれました。講演の内容が何であったか忘れましたが、実は今だに鮮烈な記憶として残って居て、折に觸れて想い出すことが一つあります。

偶々その日、私も大会終了まで居ることが出来ず、途中で帰ることになった為、新幹線の驛まで橋田さんと相乗の車で送って頂くことになりました。その車中で彼女がこう言つたのです——

「実は今日の講演は、半年以上前に夫の友人から頼まれた為、主催者が誰であるか確めもせず、気軽に引受けてしまったのですが、こちらへ来る間際になってからロータリー

だと分り、しまった、と思いました——然し今更お断りも出来ず、気が進まぬまゝ、参りましたが、私はロータリーやライオンズは大嫌いなのです」

私はびつくりして、何故ロータリーやライオンズが嫌いなのですか？ と聞きました。すると曰く

「色々ありますが、一つの例を挙げれば、町へ芥箱こみばこや時計を寄附するでしょう。それはいいのですが、何故麗々しく、これ見よがしに、○○ロータリークラブなどと書くのですか。良いことするなら黙ってすれば良いのです。あの姿勢が鼻持ちなりません」これには私もいささか盲点を衝かれた様で、一瞬戸惑いましたが、ロータリーの名譽にも関することなので、広報くわんぱうということの眞意を説明して何とか辻褄合わせしておきました。然し基本的には価値観の相違で、本当にこれで納得されたかどうか疑問です。

古来東洋の道德観では陰徳いんとくということを貴びます。善行は誇らしげにやるものではない、報恩感謝の気持で人知れず自然体でやってこそ価値がある——またそうすることによって、「陰徳あれば必ず陽報あり」という結果が得られるのです。とりわけ日本人の心情で

は、こういう姿勢が責ばれるのであって、神社・佛閣の境内に並んでいる献金の石碑など見ても誰も尊敬しません。ましてロータリーは「超我の奉仕」などという大上段に振りかぶった標語を掲げているではありませんか。考え様によつては矛盾も甚しいと言えるでしょう。正に「羊頭を懸けて狗肉を賣る」^{たぐい}類でしかありません。橋田さんの痛烈な批判にたじろいたのも、実は私自身、こんな芥箱記名問題^{ごみばこ}どころではない。もつとひどい羊頭狗肉の内実を知っているからです。

それについてはまた後程お話するとして、先ずロータリーが唱道する広報の眞意を考へてみましょう。

実は陰徳^{いんとく}というのは何も東洋道德の專賣ではなく、西欧人の多くがその生活規範としてゐるキリスト教にも見られる思想です。聖書では「己が前にラッパを鳴らすな」とか「施しをなす時、右の手のなすことを左の手に知らすな」と説かれています。然し一方で、「汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。また人は燈火をともして升の下におかず。燈台の上におく。斯くて燈火は家にある凡ての物を照らすなり。斯の如く汝ら

の光を人の前にかがやかせ、これ人の汝らが善きおこないを見て、天にいます汝らの父を崇めん為なり」ともあるのです。人間万事、盾の両面・メダルの裏表で、一方だけを固執しては頑固偏屈と言われましょう。

時折新聞報道で美談として伝えられますが、市役所や福祉施設に、永年にわたって匿名の送金が続けられたり、また社会事業に多額の寄附をして絶対に名前を公表させない、という人もあります。まことに見上げた態度で、尊敬に値しますが、たゞそれ程頑固にならず、淡々とさりげなく寄附して、然も決して表彰など望まない、というのも清々しいものです——これは聖書の教の両面を併せ備えたもので、却ってこの方が世道人心を益することと多大なものがあるかも知れません。

ロータリーの言う奉仕も実はこうあるべきで、従って広報もこの精神を逸脱してはならないのです。そう言う観点からすると、例えば財団への寄附にしても、ポールハリス・フェロー程度ならまだしも、冠名寄附などとなるとどうも私には馴染めません。またポールハリス・フェローでも仰々しいメダルなど必要ないと思います。第一、あれを貰って下げて歩けるでしょうか。フェローの徽章にしても私は付けたことはありません。ましてダイヤ

入りの襟章など正式には認められていません。私が付けているのは、誰でもしている普通の襟章——それも成るべく目立たぬ小さなものです……但し小さなものにする、というのは実は近頃やたら目立ちたがり屋が多くなったことに対する反骨でもあります。ところが官僚機構が整った国際ロータリーは、この人間の弱点である虚栄心を上手に利用して、あれやこれや飴を沢山用意しています。

話を本題の広報にもどしましょう——ロータリーに広報が必要だというのは、他者に対する奉仕、特に地域社会に対する奉仕活動を使命とするロータリーが、地域社会の人々から正しく認知されなければ、奉仕活動も有効に機能しないからです。また増強・拡大も、地域社会の人々がロータリーに対する認識を深め、自分もこの運動に参加したい、という意欲を起こす様になってこそ可能だからでありましょう。先程の、ロータリーが嫌いだと言われた方に対する私の弁明は、こういう意味で広報の必要性を説くにとどまりました。ところが、会員の数が増え、町中到的所でロータリーの襟章を付けた人が目につく様になるにつれ、その人達の好ましくない行動もまた時に目立ってきます。そうなると、先程

の指摘の様に、ささやかな寄附も奉仕活動も、所詮自己宣伝としか受取られなくなってしまうのです。

一方、国際ロータリーの方針も、当初はどちらかと言えば陰徳を貴しとして、自分の功を誇らず、成功したプロジェクトでも自分は裏方に廻って、功を協力してくれた相手方に譲る、という心構えでした。即ち聖書の文言を借りれば、「己が前にラツパを鳴らすな」でした。ところが近年は全く方針を轉換して、「汝らの光を人の前にかがやかせ」となりました——要するに「これ人の汝らが善きおこないを見て汝らの父なる国際ロータリーを崇めん為なり」ということでしょうか。

何故、また何時から、この様に変ってきたのか——それは組織の宿命として、ロータリー活動が個人奉仕から団体活動へと傾斜して行ったことと軌を一にしています。そうなる当然、広報活動も、ロータリアン及びロータリークラブが地域社会で活動し易くする、ということより寧ろ新会員を獲得する、という増強拡大の為の手段、という一面が重視される様になったのです。

現在の『手続要覧』にはまだ確かに、「ロータリーの目的の本質は、個人による奉仕の

理想の実践という責任の受諾にある」という文言が残っていますが、すぐそれに続いて、「そしてまた重要なのは、この責任の中には、個々のロータリアンが他の人とロータリアンを分かち合い、適格者を会員に推薦することによってロータリアンの拡大に協力するという義務も含まれている」と釘をさしています。あるいはまた、「新会員をロータリアンに引き付け、現会員を引き止めておくのに広報が重要である。ロータリークラブ、特に、クラブ会員増強委員会に対して広報の重要性を強調しなければならぬ」という一項もあります。

然らばロータリアンの現実の姿はどうでしょう。堂々胸を張って地域社会に広報出来る様な姿でしょうか。「会員数の増加が、会員の質の低下につながってはならないということ」を認識しつつ、会員増強に対して積極的な姿勢を取るべきである」などと言っています。前段の言葉は単なる修辭的枕言葉で、眞意は後段にあるのでしょうか。現実問題として、R・Iの会員増強督勵には「質の低下につながってはならない」という様な歯止めは一向に見当りません。

会員増強と広報に関して、先程から引用している文言は、何れも皆最新の一九九五年度版『手続要覧』に由るものですが、同書・広報の部に「広報におけるロータリークラブの

責務」として、「ロータリーの聲価を損い、その効果を制約しかねない地域社会内もしくはクラブ内の状態を防止・矯正するための積極的措置を講じる」という一九八三年度理事会決議が出ています。また「不利な広報」と題して、「他のクラブまたはR・Iに影響を及ぼすような事態が存在したり、あるいは問題が発生した場合、クラブはできるだけ早い機会にガバナーに報告し、協力してその問題に対処できるようにしなければならない。地域社会との関係において問題の発生を抑制し解決するためにクラブに助言および援助を与えるのはガバナーの責務である。事務総長は、R・I会長およびR・I理事会に絶えず報告し、もしその審議を必要とする問題であれば、これをR・I会長およびR・I理事会に回付して、ガバナーやクラブを援助する」という八二年度決議のあることにも御留意下さい。

これは一体何を物語るものでしょうか？

問題の核心に迫る前に先ず言葉の意味から解明しましょう。たゞ今私は、ロータリーの現状が果して胸を張って地域社会に広報できるか、と言いましたが、「語るに落つ」で日

本語の広報は、単に広く知らせるということに過ぎません——そこで広報委員の皆さんも、恐らく自分達の任務はロータリーを地域社会の人々に対して広告、宣伝することだ、と理解しているでしょう。従ってロータリーの雑誌も情報も、広報委員会に取っては広告・宣伝の材料、手段に過ぎなくなります。

然し原典である英文を御覧下さい。P.117では“public relations”とあります。これをそのまま直訳すれば、「公的關係」——もつと説明的な訳をすれば「社会大衆との諸關係：相互の間柄」ということです。つまりロータリーの広報とは、地域社会、一般大衆とロータリーとの相互理解を深め、お互に協力し合つてより良い社会を作る為の活動なのであります。そして、その一つの手段として、社会的影響力の大きいマスコミとの良好な関係を築くとか、意義ある業績について広告・宣伝——即ちpublicityもするとかいうことになるのですが、日本語訳の広報という言葉では、publicityという狭義の側面だけが強調されて、本来の目的が曖昧になってしまします。

ともかく“public relations”という本筋に沿つて考えてみれば、ロータリーの雑誌を公衆の目に觸れる場所に配布するとか、マスコミ関係者を職業分類の定数制限無しに会員に

取り込むとかいう様なことは、何れも枝葉末節の便法に過ぎません。地域社会との関係、公衆との間柄という public relations の王道は、日常生活に於て現実社会と接觸しているロータリアン個人個人の行動の中にあるのではないのでしょうか。会員一人一人の生活の姿勢が立派であれば、もうこれ以上立派な広報は無いのであります。

さて、広報とは何かということをご様に理解した上で、先に引用した理事会決議をもう一度熟読してみましょう。

この様な決議が出るということは、取りも直さず、ロータリーとして好ましからざる、不名譽な所業が目立ってきた、ということに外ならないでしょう。

記憶の糸を手繰ってみて下さい——八〇年前後まで遡って近々二十五年としましょうか、この頃からの経済成長は目覚ましいものでした。政治的な激動も経験しました。ロータリーもどんどん拡大発展して行きました。然し、それに伴う精神の荒廃も凄まじいものがあることを見逃してはなりません。

国際情勢はさて置き、一番身近な日本のことを振り返ってみましょう——ロッキード事件

が発覚したのが一九七六年で、その年の流行語は――〈ぜんぜん記憶にございません〉――でした。同じ科白せりふは未だに衰えを見せませんが、各年々の流行語を拾ってみるのも一興です。七七年が――〈ころがし〉――、七八年が――〈角川商法〉――、八〇年になると、いまだに新聞で連日叩かれています――〈カラ出張〉――、――〈ヤミ給与〉――、八六年――〈財テク〉――、八七年――〈言語明瞭意味不明〉――、八八年――〈インサイダー取引〉――、九〇年――〈バブル経済〉――、九一年――〈損失補填〉――、九二年――〈靈感商法〉――、――〈とばし〉――、九三年――〈ヤミ献金〉――、九四年――〈同情するならカネをくれ〉――……もうきりがありません。やめておきましょう――要するに私が言いたいのは職業人の生活姿勢で、何れも皆職業人に対する警鐘です。

そうなると、これは職業奉仕の問題になりますが、ロータリアンと社会との接点は正に職業ではありませんか。ロータリアンが職業上鞆たぶらを買ような行動をしている限り、ロータリークラブが、あるいは国際ロータリーがどんな立派なお題目を掲げて金をばら撒いてみても、世間は一向尊敬してくれません。あくどいことをやって気が咎めるから、罪滅ぼしにお布施しているだけだ、と言うでしょう。ロータリー広報の窓は先ず職業にあります。

職業こそ広報の王道です。会員一人一人の姿勢を正すこと——広報はそこから出発します。先に引用した『手続要覧』九五年版の文言、「広報におけるロータリークラブの責務」という項目を、この観点から眞剣に考え直してみる必要があるのではないでしょうか。

この「クラブの責務」ということに関聯する具体的实例をお話致しましょう。假空の話ではありません——私が実際に当面して困惑している問題です。

一つは昨年の秋、私がクラブ創立の時お手伝をした我が地区内のあるクラブ会員から、匿名の投書が来た事件です——そのクラブの元会長某氏の会社が、不法滞在の外国人労働者を多数雇用して労働基準監督署の査察を受けたこと、またその上賃金不払問題で労働委員会に提訴されていること、等の事実を挙げ、事業経営でそんな不法な行為を重ねながら、一方クラブへ来ては元会長の権威を振り回して威張っている……こんなことが許されていいのか？ という趣旨でした。

それが虚報でないことは、新聞記事として採り上げられ、その切抜まで同封してありましたので納得できました。またこの投書の前書に、先頃の研修会で私が基調講演をした際、

黙っている善人は悪魔の味方だ、良いことは良い、悪いことは悪い、とはつきり言え、という話があつて、それに勇気付けられたので今迄迷っていたが思い切つて直訴する、とありました。然し私にしてみれば、困つたことにこれは匿名の投書です。これでいゝのか？と問われても答える相手が分りません。本人の気持としては、折を見てクラブへ来て話をしてくれ、あるいはその問題の元会長に忠告してくれ、然し自分の名は明かしたくない、というのでしょうか、これは一寸卑怯です。新聞にまで出ている事実なのですから、堂々と名を明らかにして言うてくるべき筋合です。またこんな問題が起きたなら、それこそそのクラブで職業奉仕委員会の議題にすべきでしょう。正に『手続要覧』に書かれている通り、これに対して「積極的措置を講じる」のが「クラブの責務」です。

もつともこの投書の様な事例は、私共の地区ばかりでなく、外にも恐らくあることでしょう。従つてそれ程驚きはしませんでしたが、もう一つとんでもない不祥事がありました。あまりにも恥ずかしい話で今この公の席で申し上げるわけには参りません。それは『手続要覧』にある「不利な広報」＝ Adverse Public Relations として、もうこれ以上ロータリーの信用を傷つけるものが無いからです。

今年の干支は子ねでしたが、そのせいでしょうか、頭の黒い鼠ねが沢山捕まりました。それも今まで見たことも無い様な大鼠が、霞ヶ関あたりからぞろぞろ出て来たので驚きました。永田町の猿や大鼠はもう見なれていますので今更驚きませんが、霞ヶ関の鼠は假に居ても小鼠ばかりだと甘く見ていたのが大間違でした。これは由々しき大問題で、ここまできると、もう個人の倫理など論じても詮ないことです。結局これは、戦後の日本が政・官・民三者協同歩調で築き上げた社会組織の構造疲勞という外無いでしょう。

如何なる組織も急速に拡大膨張すれば、創業当初の構造計算ではその荷重に耐えられなくなつて崩壊する…戦後五〇年を経てとうとうその猶予期限が来てしまったのです。

これは單に政治、經濟だけの現象ではなく、日本の社会組織全部に共通する問題でしょう。教育の荒廢、家庭崩壊、青少年非行、凶悪犯罪…何れも皆日本社会の構造疲勞という外ありません。

同じことが国際ロータリーについても言えます。就中一九四九年、念願の国際ロータリー復帰を果した日本のロータリーは、戦後の復興とそれに続く經濟成長の波に乗つて、急速

に増強拡大を遂げました。それから凡そ五〇年——この時に当って、私は今の日本のロータリーに深刻な危機感を覚えざるを得ないので。今や屋台骨がぐらついています。明らかに構造疲労です。

何を見てそう言うか——率直に言つて、永田町や霞ヶ関の住人と変らぬ精神構造の人がロータリーにも現れ始めたではありませんか。途上国のロータリーでは、価値感の相違で時に我々を驚かす様な行状もありますけれど、日本のロータリーだけは几帳面で眞面目で寧ろ馬鹿正直過ぎるくらいだ……と半ば自嘲気味だった私ですが、ここへ来てすっかり考へ込んでしまいました。変れば変る世の中です。

「衣食足つて礼節を知る」という言葉がありますが、衣食足らず、如何にして窮乏から抜け出そうかと汗を流していた昔のロータリアンには、「武士は食わねど高楊枝」という颯爽たる気骨がありました。然し飽食暖衣の今、日本のロータリーはゴルフクラブかカラオケバーみたいになつてしまつた、と言つては少し言い過ぎでしょうか。衣食足つて逆に心は喪家の狗と化したのです。

年寄の繰言とお笑い下さい——曾て私達にとつて週一度の例会出席はいのちの洗濯でし

た。私達がロータリーに心酔したのは、ロータリーが、ひたすら富と権力と名声を追い求める俗界の營みと全く正反対の志を持っていたからではありませんか。ロータリーがそんな俗界の營みと同じ軌道に乗り始めたら、もうロータリーの存在意義はありません。寄附を集めて慈善事業をやるだけの組織だったら俗界にいくらでもあります。ロータリーは宗教ではありませんが、やはり宗教に比肩し得る。あるいはあらゆる宗教を呑み込んだ・高次の精神的結社でなければなりません。

それなら、何故こんなにロータリーの屋台骨がぐらついてしまったのか？ その辺の事情も一寸考えてみましょう。質と量の問題は何時も議論の種になりますが、大きな建物には、やはりそれを支えるだけの梁や柱が必要です。基礎工事もそれに見合ったしつかりしたものでなければなりません——然し息つく暇もなく増築を重ねてきた日本のロータリーには、基礎工事の手抜もありますし、また現在の様な大きな建物の荷重に耐えられるだけの梁や柱が不足しています。

譬話でなく、もっと具体的に言えば、戦後民主主義の弱点——利己的悪平等意識や、自由と放任の履違えが、指導的立場にある人から「高貴の義務」という徳性を失わせてしまっ

たのです。つまり梁や柱に鬆⁺が入ってしまったということでしょう。加えて急拵⁺えの増築ですから、本来なら梁や柱に使えない様な弱い用材で間に合わせることになりました。

更にまた八〇年代の泡沫経済が、勤勞蔑視、一攫千金の拜金思想を生み、欲望の捌け口は金と権力でしかなくなったのです。これが先程指摘した戦後日本の構造疲勞ということになるわけですが、こうした構造疲勞がロータリーにも及んできた、ということをおは憂⁺えるのであります。

米山さんがロータリーを日本に導入した当時の会員は、それこそ財界の巨星ばかりでありました。そういう会員選考の基準はその後引継⁺がれてきたのですが、戦後一億總中産階級になり、また増強拡大の要請が強かった為に、ロータリーは決してエリート集まりではない、一般市民にロータリーの輪を拡げなければならぬ、ということが過度に強調される様になりました。私とて、米山時代のロータリーが良いなどは決して申しません。第一、あの当時の会員選考基準だったら、私などロータリーに入れて貰えなかつたでしょう。だから、ロータリーを広く一般市民のものにしよう、ということは良いのです。然し

ロータリアンは決してエリートでない、などという自己否定には賛同しかねます。

考えても御覧なさい：ロータリーには職業分類という原則が厳として存在しています。職業分類に従って、それぞれの業界から事業上も、人格上も申し分無い人を、その業界を代表する人物として選ぶ——これがエリートでなくて何でありましょう。エリートだからこそロータリアンとして選ばれることは名譽なのであります。その代り、エリートの名譽にふさわしい「高貴の義務」＝Noblesse oblige＝が要求されるのです。エリートを否定し、そして「高貴の義務」を説かなくなつた為に、現代社会の構造疲勞がロータリーまで侵し始めた、と私は考えます。

それでは最後に、構造疲勞に陥つた組織の屋台骨を建て直すにはどうしたらいい、の一寸考えてみましょう。

御承知の様に、政界は離合集散・解体建直しで右往左往しています。行政は省庁再編成、権限の民間委譲、地方分権推進で、金のかからぬ小さな政治が望まれています。企業は部門別独立採算制から更に進んで各部門を独立法人とする分社化の方向へ進もうとしています。

す。国際政治も経済的には国境が無くなって物・金・人の移動が自由になる一方、民族自治の要求が強まって、文化的・行政的には小国分立が更に進むでしょう。

こういう社会構造の変化に、国際ロータリーが目をつぶっていれば、ロータリーは愈々空洞化するでしょう。建前としては各クラブの自治権を認めている様で、実はR・Iの為の地区・地区の為のクラブ・クラブの為のロータリアン……という体制が年毎に強化されてきているではありませんか。その結果としての構造疲労です。してみれば今ロータリーにとって緊急の課題は、個人奉仕の原点に還ること、そして会員一人一人の体質を強化することではないでしょうか。

会員一人一人にエリートとしての誇りと責任感を持たせましょう——但し誤解しないで頂きたい：エリートの自覚とは傲慢な独善を言うものではありません。「稔るほど頭の下がる稲穂かな」——この一句の中にエリートの眞骨頂が示されています。そういう謙虚な姿勢を貫きながら、率先自己犠牲の勞を惜しまない——それが「高貴の義務」であつて、そういうエリートを育てることこそロータリーの使命なのです。

さてその様な志を立て、ロータリーの構造を強化するとなれば、ロータリー組織の屋台

骨を形成する幹部の責任は殊の外重くなります。役職者はまたエリート中のエリートだからです。ところがどうでしょう……大蔵省は官庁の中の官庁・大蔵官僚は官僚の中の官僚・大蔵省は国家なり……と自他共に認められた大蔵省のあの轉落振りは一——ローターに同じ様な現象が起ることなど考えられない、と果して誰が断言し得るでしょうか。「権力は墮落する」という戒めは古今に通ずる眞理であります。

なお蛇足ながらも一言付け加えておきましょう。如何なる組織もその活動を支えるのは金と勞力でありますが、官庁や企業とローターの根本的な違いに着目して下さい。政治家も官僚も企業人も、終局的にはその目的とする所が、人類・社会への奉仕にある、という点ではローターと変わりありません。然し政治家も官僚も企業人も、その提供する勞力に應じて報酬を求めます。然しローターは無償の奉仕です。それどころか、勞力、時間に加えて個人の私財を抛出するのです。組織の性格に於て基本的には違ふのはその点であります。何でも無い様ですが、実はこれをはつきり認識することが大切です。

ところが戦後日本の税制との関係もあつて、ローターの会費を会社が負担する様になり、更に会社の金で財団に寄附して自分がポールハリス・フェローになる、という妙な事

態も現れました。それはまだしも、他クラブにメイクアップした時の食事代まで会社に付け回す、となると果していかなものでしょう。そういう風潮に誰も疑を持たなくなる、今度はロータリーの役職奉仕にあたって自己犠牲の精神が失われてしまいます。役職奉仕に要する個人的出費は本来自分の懐から出すべきものでしょう……俗に言う「自腹を切る」——そこに「高貴の義務」の美学があります。政治家になれば、昔は井戸堀と言われました。だから昔の政治家には剛直で志の高い人が居て、国民の尊敬を得ていたのです。この頃はそんな政治家などと見られなくなり、逆に蓄財に勵む人が目につく有様です。国民はもう政治家など尊敬して居りません。官界も同様で、政治・行政の構造疲労がそこに歴然と顯れています。

ロータリーは井戸堀になることなど決して要求して居りません。寧ろ自分の職業を眞面目にやって汚れの無い金を大いに稼いで下さい——個人の報酬はそこから得て、そうしていったん自分の懐に入った金を、今度はロータリーの為に使って下さい……ロータリーはそう望んでいるはずですよ。だとすれば、ロータリーの指導者は率先垂範、自腹を切るべきでしょう。ところが近頃は地区資金におんぶして自腹を切る幹部が少なくなりました。ロー

タリーの構造疲労がここから始まります。

構造疲労した政治も経済も、その建直しの為に先ず大鉦を振るわなければならぬのは、組織の贅肉落としてです。何故かと言えば、肥大化した組織には金がかかり過ぎるからです。組織を構成する人件費ばかりでなく、金を中央に集めてそれから再びこれを末端に流すという方式には必ず腐敗がつきまとうことがはつきりしました。

ロータリーもここから学ぶことが沢山あります。然しロータリーには先に申し述べました様に官庁や企業と全く違う基本理念があります：つまり手弁当で奉仕する、ということ です。この理念さえ徹底すれば地区や分区の役職者がいくら増えても問題無いでしょう。考え様によっては役職という名譽を与えて、その代り自腹を切らせる——要するに個人奉仕の原点に還ること、そうすれば組織維持の経費も少なくてすみます。

人の禪で相撲をとりながら自分だけいいかっこする：そんな幹部を作つてはいけません。そういう人が現れる様になつたのは何時頃からでしょうか——個人の品性と倫理が問われる職業奉仕のことをあまり言わなくなつて、財団の資金蓄積にロータリーの重点目標が移つて行つた、そのあたりが運命の岐れ道わかだった様です。

次元の低い金の話になってしまつて申訳ありません——然し、「とかく浮世は色と金」と申します。意のある所御賢察下さい。「白猫だろうと黒猫だろうと鼠を取る猫はい、猫だ」……という様なロータリーにだけはしたくないのです。

あとがき

佐藤千壽パストガバナ―は常にロータリーの原点にかえって現状を的確に、透徹した理論で分析批評され、その鋭さには定評がありますが、今回の講演を再度原稿で読ませて頂き、感嘆致しました。

冒頭のお話で、橋田寿賀子さんがロータリーやライオンズが寄付した時計やごみ箱に麗々しく名前を入れることに反発を感じられるのは私も同感です。奉仕の中味が地域の真のニーズに合ったものか、我々側の都合でやったものであるかが評価が別れる鍵だと思います。

先生は、広報とは“Public Relation”―地域社会の人達との関係を高めることであり、それはロータリアンの心と身体から、また職業実践を通してにじみ出て来て、それが地域の人々に知られる事こそが広報の原点と喝破されております事、つい名前を知らせること

を追いがちな私達に取って大きな示唆になりました。

ロータリーは人であり。人の道は心であり、人の心は行にあり。良きご指導に心からお礼を申し上げます。

一九九七年三月七日

国際ロータリー第二七八〇地区

ガバナー
河本親秀

あとがき

いつもながら齒に衣させぬ佐藤先生のお話を伺いまして、まだまだ修行不足の身の自分を反省致しております。

戦後五十年を経て、ロータリーにも構造疲労が表れ、霞が関や永田町の人々と変わらなくなつてきており、深刻な危機感を覚えるようになってきている、とまで極言されました。ロータリー広報の王道は、日常生活において、現実社会と接触しているロータリアン一人一人の行動の中にあり、その生活の姿勢が立派であれば、これに勝る広報は無いと説いていらつしゃいます。

ロータリアンと社会との接点は正に職業にある、ロータリーの広報の窓は先ず職業にと喝破されました。

我々も襟に付けているロータリーのエンブレムに恥じないロータリアンになるようお互

いに精進致しましょう。

最後になりましたが、ご講演戴きました佐藤先生に衷心より感謝申し上げます。

地区クラブ奉仕担当

パストガバナー

真

崎

勇

ロータリー広報の王道

—組織の構造疲弊に就いて—

発行日 一九九七年三月吉日

著者 佐藤 千壽

発行者 国際ロータリー第二七八〇地区

地区クラブ奉仕委員会

神奈川県平塚市黒部丘一―一二

黒部ビル三F

TEL 〇四六三(三三)二七八〇

FAX 〇四六三(三三)五〇〇一

印刷所 (株) 梅津印刷社

